

短大生の話し言葉にみる 談話標識「なんか」の一考察

飯尾牧子

Abstract

This paper aims to look into the usage of the discourse marker *nanka* in junior college students' daily language. The literal meaning of *nanka* is "some, any, something, anything." However, in junior college students' informal conversation, it indicates turn initiator, filler, and softener, in addition to the original meaning. Surprisingly *nanka* appears very frequently in their conversation; initially, medially, and finally, and also *nanka* with stress or unstressed shows different usage. It seems that the discourse marker *nanka* plays an important role in making the conversation smooth and flowing.

1. はじめに

社会言語学の分野において、談話標識やつなぎ語、あいまい語に関する研究が本格的に始まったのは1970年代でありその歴史はまだ浅い。それまで会話のなかに頻繁に使われる「えーと」「あの」「まあ」や英語の‘well’, ‘you know’などは単に会話の間を埋める言葉 (filler) として考えられており、品詞以下として特に注意は払われてこなかった。

70年代に、Schegloff と Sacks (1973) が ‘we-ll’, ‘O.K’, ‘so-oo’ を観察し、これらの言葉はしばしば「ある話題の会話を終える時や新しい話題を始める時に使われる」と述べ、これらの言葉に特定の機能があることを指摘した。

また Schiffrin (1987) は、‘oh’, ‘well’, ‘and’, ‘but’, ‘y’know’, ‘I meam’ など全部で11種類の英語の談話標識を扱いそれぞれの機能や役割を分析した。彼女は、談話標識 (discourse marker) は普段の話し言葉のなかで重要な役割をしており、“sequentially dependent elements which bracket units of talk” と述べている。また、談話標識の研究は“analysis of discourse coherence” と述べ、談話標識が会話の内容と強く関係しており、文章の統語的特徴のみでは説明できないとしている。言い換えれば、同じ談話標識でもその会話の状況においていくつかの違った意味をもつということで、これは話者と聞き手がお互いに理解していなければならない重要なことである。

日本語においては、しばしば終助詞の「ね」が英語の‘you know’と機能が似ている（メイナード1993）として研究の対象となってきた。金田一（1975）や水谷（1985）によると、「ね」は話し手が聞き手の推定に同意する時や話し手が聞き手に同意を求める時に使われると述べている。すなわち、終助詞「ね」は「共感」を表すということである。

会話における様々な現象を取り上げている Maynard (1989) は、‘uuunto’, ‘are’, ‘hora’, ‘nanka’ のような filler に関する研究をしており、fillers には、1. 沈黙を回避する、2. 話の継続を示唆する、3. 躊躇や不確かさを表明する、4. 発話を和らげるなどの働きがあると指摘している。

Saito (1992) は、20代の若者がそれぞれ男性のみ、女性のみ、男女混合のグループのとき、日本語でどのような談話標識が使われるかを研究し、そのなか（だから、でも、なんか、だって、それで）でも「なんか」が突出して多い事を指摘している。そしてその主な機能として、会話を和らげる（softener）、つなぎ語（filler）、発話権の獲得（turn initiator）を挙げている。いままでの談話標識の研究においては、話し手の年齢層との関係を深く研究した物があまり多くない。そういった観点からは Saito が20代の若者の談話標識の機能に注目した点は興味深い。

一方、若者語の研究者は、米山（1996）を始め「若者の話し言葉は変化が激しく絶えず新しい言葉と使い方が生み出されている」と指摘している。前述の Saito の研究から10年以上が経っているが、現在でも談話標識「なんか」は若者の話し言葉の中で頻繁に使用され、10年前と同じ機能・役割をもっているのだろうか。それとも何かしら変化しているのだろうか、これらを確認するのが本研究の目的である。

なお、「なんか」はフィラー（filler）、あいまい語、談話標識（discourse marker）等いろいろな呼び方があるが、その分類は研究者によってまちまちな部分が多く統一されていない。したがってこの論文の中ではこれを談話標識と呼ぶことにする。

2. 研究方法

2.1 対象者

若者の普段の話し言葉は友だち同士である場合が圧倒的に多い。そして、2人よりも、数人のグループの方が話題に事欠かかず発話がスムーズになる、そのため今回の実験は5名のグループで行った。

本研究のデータ収集に協力してくれたのは、現在東洋女子短期大学の2年に在籍する5名である。以下の表1に5名の情報があるが、この5名は1年次より全員同じクラスで、普段から仲が良く親しい間柄である。よって彼女たちがお互いに使う言葉は完全にインフォーマ

ルである。

リスト中の「一日に友だちと話す時間」は、彼女たちが一日にだいたいどの位今回のデータと同じ様な「若者語」を話すのかを知るための目安である。学生 B が360分と突出して多いのは後のインタビューによると、彼女のアルバイトの時間の長さと同比例している。

表1 対象者リスト

学生	年齢	出身地	一日に友だちと話す時間
A	20	東京都	約120～150分
B	19	千葉県	約360分
C	19	埼玉県	約120分
D	19	三重県	約150分
E	19	千葉県	約120分

2.2 データ収集の手順

データは、ソニーのポータブルカセットテープレコーダーを使用して収集した。テープレコーダーの存在をできるだけ意識させない様、テープレコーダーは小型のものを使用した。5名の学生には小さな部屋でテーブルを囲んで座ってもらった。話に詰まった時のために、こちらで話題リストを用意し利用してもらった。学生にはデータ収集のために普段通りに話して欲しいとしか伝えられていない。録音時間は約1時間半、しかしはじめの20分間は学生の緊張などにより普段と違う発話になることを懸念してデータには入れていない。また、学生の普段の発話に影響があるといけないので、録音の間私は部屋から退出した。

2.3 データ分析方法

日本語のインフォーマルな会話文は大抵多数の小さな単位に分けられる。Chafe (1980) は“clause final rising or falling pitch is the most consistent signal”と言及しており、その単位を“idea unit”と呼んでいる。そしてそれぞれの“idea unit”は大抵1つの情報を持つとしている。また、Schiffrin (1987) の提唱する談話標識の“unit of talk”はChafeの“idea unit”と似ている。文という単位が必ずしもデータを分析する上で、適切な単位ではなく、談話標識は文の中で極めて自由に使われ構文上定義するのが困難である。したがってデータ分析には、“idea unit”を採用し、便宜上これを節と呼ぶことにする。

3. 結果と分析

今回のデータのなかでも、談話標識「なんか」の使用頻度はとても多く、節頭、節中、節

尾の至る所でみられた。表2はそれぞれ5名の学生の節の数と「なんか」の回数を示したものである。

表2 節, 「なんか」の回数とその割合

学生	節の回数	「なんか」の回数	「なんか」の割合
A	305	34	0.11%
B	245	26	0.11%
C	204	43	0.21%
D	88	14	0.16%
E	19	0	0%

これらの数をみると、節の回数が一番多かったのは、学生A(305回)で、一番少なかったのが学生E(19回)である。学生Aに続いて学生Bと学生Cが常に会話全体をリードしていた。一方、会話の中で「なんか」の割合が高かったのが、学生C(0.21%)である。あとの3人はそれぞれ、0.11%と0.16%であった。学生Eは会話にほとんど参加していなかった、普段から仲の良い5名であるが、学生Eの参加が極端に少なかったのは、当日の彼女の体調が悪かった等の理由が考えられる。(後日のインタビューで風邪を引いていたことがわかった)発話数が極端に少ないことと「なんか」の使用回数がないため、学生Eはこれより後のデータ分析から除外する。

さらにデータを分析していくと、同じ「なんか」の中に、強形で「なんかぁ」または「なんかさぁ」と発音されるものと、弱形であたかも「なか」または「なんか」と発音されるものの2種類があった。山根(2002)も「[ナンカ]にはアクセントにゆれがある」と指摘しており、「なんか」はいつも同様に発音されていない。下の表3は「なんか」の使われた場所を3つ(節頭, 節中, 節尾)に分類し、さらにそれぞれが強形で発音されたか又は弱形で発音されたかを分類したものである。

表の最後の合計からわかるように、「なんか」が一番多く使われる場所は節中(82回)であり、節頭(29回), 節尾(6回)の順に続く。この順番は4名の学生全員に共通する。さらに「なんか」の強弱に関して、弱形が一番多く使われるのは節中であった(A 21回, B 19回, C 30回, D 8回)。これらの回数は他のどの場所に使用された「なんか」の回数よりも多い。反対に節尾において強形が使われることは4名のうち一度もなかった。節頭では、「なんか」は強形と弱形の回数は弱形のほうが若干多いものの、さして大きな開きはない。これらより、「なんか」は節頭においては強形, 弱形の両方がほぼ同じ様に使用され、節中と節尾では弱形が中心に使用されるという図式が示される。

表3 「なんか」の使用箇所及び強形弱形による分類

学生	節頭		節中		節尾	
	強	弱	強	弱	強	弱
A	3	4	4	21	0	2
B	1	5	0	19	0	1
C	5	6	0	30	0	1
D	3	2	0	8	0	2
合計	29		82		6 /117	

実際の会話の中でそれぞれの場所にあらわれた「なんか」がどのように使われているのかをみていきたい。

節頭の強形で使われる「なんか」はほとんどの場合において、発話の順番を獲得するマーカの役割で使用されている。

(1) B: 嬉しいときもあるよね。

A: ウン, あるある。

C: なんかさあ, 昨日ヴィトンのバッグもって成金みたいな人が来て…

はじめは学生BとAが話をしていたが, その会話の中に自分の話題を入れて欲しいとき, 学生Cは始めに「なんかさあ」と強形を使い, 他の話者の気を引きつけようとしている。また(2)では, 学生Bがずっと話の場を保ってきたが, そこに学生Dが違う話題で話し始めるときに使われている。

(2) B: …仮面ライダーが映画化するの, なんか初代のさ…

D: なんかさあ, インザプールっていう小田切ジョーが出てるの, 本郷で撮ったって言ってたよ。

「なんか」が節頭で使われるときは, 後に「さあ」が付きそこにストレスがあることが多いが, 中には「なんかあ」というように「か」にストレスがくることもある。

(3) B: フレアってどういうの?

A: ほら, ひらっと, こうなってる感じの…

D：なんかあ、なんか良く行くご飯食べに行くお店の、なんか店員さんとしゃべったら、なんか接待の様子とか良く書いてるんだって。

上の(3)は、学生BとAの話題に、学生Dが唐突に思い出した話題を話そうと、「なんかあ」という言葉をきっかけとして発話に入り込んだ例である。この様に「なんか」を節頭で使うときは、発話の場をつかむ事ための大きな役割を持っている。また、この例では「なんか」が2度繰り返して使われているが、Shibamoto (1985)によると、言葉の繰り返しは女性の話し言葉の特徴であるという。これは今回のデータの中で、節頭だけでなく節中でも見られた。(11)参照)

同じ節頭でも「なんか」が弱形で使われる場合は強形の時のような断固とした発話獲得のための意志のようなものはなく、ただ単に前の発言者に意見を補足するという役割で使われている。

(4) A：こっちから編入ってさあ、友だち作んの大変じゃない？

C：なんか誰もいないしね、はじめは。

例(4)では学生Aの意見を補うように、学生Cが「なんか」を節頭に使い話を続けている。この様な場合、「なんか」なしに発話をはじめると唐突な感じがするため、ある意味でクッションの様な緩衝的役割を果たしている。

(5) A：よく、若者にインタビューっていうとき、いつも渋谷に行くのやめて欲しい。

B：なんかそういう子ばかりじゃないって思うんだけどさ、そういうのばかり取り上げられるし。

上の例では、学生Aが渋谷のギャル系の若者にのみ焦点を当てられることに不満を抱いている発言に対して、学生BがAの意見に賛成して自分の意見を続けている。この場合も「なんか」は節頭で使われることによって、学生Bの発話のはじめをなめらかにしている。

節中で「なんか」が強形で使われた例は、今回のデータの中には4件しかなかった。それも全部学生Aの発話である。

(6) A：いま渋谷の高校生でさあ、渋谷のなんかさああのほら、原色とか着てるのいるじゃん。

例(6)の様に、何かを思い出しながら「なんかさあ」を発話している例がほとんどである。次に言うことを考えながらも、話の場を渡したくない場合に使われている様に思われる。しかし今回はデータの数があまりに少ないため、これは単に学生Aの話し方の癖であるとも考えられる。

これに対して、節中での弱形の「なんか」は、今回のデータの中で一番多く使われていた形である。4名の学生のなかでも 節中弱形の「なんか」は突出して使用頻度が高く、「なんか」が使用される理由の一番のカギを握っているように思われる。

(7) A:どっちがいい,どっちがいいとか聞いてなんか結局買わないの,そのあとなんかくやしかったからファッション雑誌みてたらね…

(8) B:ちょーうざいの,なんか顔覚えられてて,それでなんか覚えてますよ,とか言われて,ずっと友だちと喋ってたらなんか注文取りにやってきて,それでなんかいつも通りたのんだら,ドリンクバーもありますとか言われて…

(9) C:あと,踊ってた子なんかちょっと踊りの。

D:そしたらその日の夜になんか夢にでてきて。

例(7)では学生Aがアルバイトをしていたときのお客の態度を話しており,例(8)では学生Bがファミリーレストランに行ったときの店員の話をしている。(9)ではドラマの話をしている。学生Aの弱形「なんか」はほとんど真ん中の「ん」が聞こえないほどで,学生Bの「なんか」の発音もすこぶる早い。上の例文のどれをとっても「なんか」なしに会話することは実際に可能であるし意味が大きく変わることはない,しかし「なんか」なしではぶっきらぼうで険しい話し方に聞こえるであろう。たとえ弱形でも「なんか」が存在することで,発話を和らげる(softener)役目をしていると考えられる。

また,弱形の「なんか」がつなぎ語(filler)の役目をしている場合もある。

(9) C:アンガールズ最近いっぱい出てきたけどなんか嬉しいけどなんか出てきすぎてね。

(10) D:顔がもろさなんかアキバ系なんだよね。今のあの人のドラマって,もとも

となんかああいう方面の…

(11) B: その時間とかにさあ一緒に「ウオーリーを探せ」もやってなかった?

A: やってた!

B: 普通にアニメとしてなんかやってて。

C: で、最後にさなんかなんか画面止まって探すの。

(12) D: 絶対そうだよ! 金に物言わせてねなんか出て欲しいゲストで、全部言い返す人とかなんか多いじゃん、言い返してほしい。

上の例文で使われている「なんか」には特別な意味はなく、話の場つなぎ的またあるいみでは、前述の緩衝的役割もしている。つなぎ語としての「なんか」は英語の 'you know' や 'I mean' や 'well' などと同じであると思われる。例 (11) の学生 C の発話の中の繰り返しの「なんか」は、例 (3) で学生 D が言っていた繰り返しと同じである。今回は参加者の全員が女性だったため、男性の場合も同じように繰り返して「なんか」を使うかその使用頻度を調べることは出来なかったが、少なくとも今回のデータでは、女性にはよくみられる傾向であるようだ。

節尾で「なんか」が使用される場合、データには弱形でしか現れなかった。これは、以下の例からも明らかのように、発話の最後をすっぱり切ってしまうのではなく、曖昧さを残しながら発話を終えるためである。

(13) B: あの、気まずい瞬間がなんか…

(14) A: たまにあるよ、面白いの、若者言葉でなんか…

(15) A: あの人はさあ、星の話なんか全然してなんか…

(16) C: 移動したって言ってなかった?なんか…

上の例は、それぞれまだ後に言葉が続きそうな気配を残しつつ終わっている。それぞれ上の例文は、「なんか」のあとすぐ次の話者によって会話が遮られたのではなく、「なんか」のあとに少しのポーズがあった。まだ、話を続けようとして考えながら「なんか」を使い、結局

は発話が終わってしまったのかもしれないが、そうであるとつなぎ語としての機能も果たしているといえる。いずれにせよ、上の例での話し手はみんな会話を断定的に終わらせようとしているのではなく、聞き手になんらかの意見や想像を委ねながら終わっているように受け取れる。

4. まとめ

短大生の話し言葉における談話標識「なんか」について、それが使用される箇所とその強弱に分類してそれぞれの例を見てきたが、それらの機能や役割をまとめると次のようになる。

第一に、節頭において強形の「なんか」は、次の発言は自分の番であることを他の話者に知らせるマーカーあるいはきっかけの役割をしているということ。節頭の弱形で使われる時は、強形の場合ほどの強い意志は感じられないにしても、前話者の意見の補足や同意的な意見を述べる時のきっかけとなっている。

一般的にみても、ある会話が続いている時に他の人が他の話題を話し始める場合、なんの合図もなしに唐突に話に入り込むことは不自然である。必ずなんらかのきっかけとなる言葉が必要であるが、その便利な言葉のひとつがこの短大生達にとっては「なんか」だったのでないだろうか。

そして第二に、節中に弱形で使われる「なんか」は、この言葉が頻繁に使われる一番の理由を占めている。今回のデータのなかで使われた全ての「なんか」のうちの7割近くを占めるこの「なんか」は主につなぎ語 (filler) の役割をしたり、発話を和らげる役割 (softener) をしている。

つなぎ語で使われている場合、「えーっと」や「あの」と用法が似ているが、今回の短大生達のデータは友だち同士のインフォーマルな会話だったため、「なんか」が圧倒的に多かったのではないかと思う。また、「なんか」は他のつなぎ語や談話標識と共に使われることもあり(例 あのなんか, でもなんか)、これらの用法に関しては、またさらに今後の研究課題であろう。

一方発話を和らげる役目としての「なんか」が頻繁に使用されたのは、若い女性の話し言葉の特徴のひとつを表している。米山 (1996) は、若者語の機能のひとつに緩衝機能をあげている。これは「相手の感情を害したり傷つけたりするのを避けて、相手への印象を和らげる機能」である。今回の短大生の会話も、言葉の直接的な表現を避けるために「なんか」をつけて曖昧にさせ表現を和らげるという雰囲気がある。また、会話の中に「なんか」を入れることによりある意味で「ノリ」の会話をしているようにも思える。緩衝の機能を持ちなが

ら、同時に会話を促進させる役割も果たしているのかもしれない。

第三番目に、節尾の弱形の「なんか」であるが、これは曖昧に会話を終わらせる時に使用されていた。「～だ」と言いきって発話を終えるのではなく、フェイドアウトさせながら終るのに「なんか」は便利な言葉なのかもしれない。発話を言い切らずに終え、そのあとを誰かに委ねるといふ話し方は、先に述べた何事にも断定を避け話全体をオブラートで包んだように会話する女性の特徴であると思われる。

「なんか」における機能は、Saito (1992) の研究と大きく変わったところはなかった。その主な機能は、会話を和らげる (softener)、つなぎ語 (filler)、発話権の獲得 (turn initiator) であった。多様に変化し続ける若者語のなかでも、談話標識というのはあまり影響を受けない分野なのかもしれない。しかし「なんか」の発音方法に強形と弱形がありそれぞれ伝える意味に多少の違いがあったということは今回の収穫である。

今回は正味1時間の会話のなかで、合計で軽く100回を越える「なんか」が使用された。面白いことに、普段の会話では「なんか」が使われていることはあまり気が付かないが、注意して聞いてみるとこの言葉は会話の様々な箇所ですごく頻繁に使用されている。それ程、「なんか」という言葉は無意識のうちに使われているといえる。発音がしやすいという事もあるのかもしれないが、意識せずに何げなく会話のなかで使われているこれ程使用頻度の高い言葉は、他にあまり例を見ないのではないだろうか。

普段の会話の中から「なんか」を取り除いてしまうと話がぎくしゃくしてしまい、唐突で不自然な感じがする。このような言葉は「思考の筋道を示す目印」(Ball 1986) である大切な言葉ともいえる。他の談話標識同様「なんか」は、インフォーマルな場面においては会話の潤滑油の役目をしておりなくてはならない存在のようだ。「どうも」という言葉が様々な場において、挨拶や感謝や謝罪の意味で使用されている(芳賀, 佐々木, 門倉 1996) ように、「なんか」も話し言葉においてオールマイティーな言葉といえる。そして、若者の話し言葉にこれほど多く使われるこの言葉は、ある意味で彼らの感性に合った言葉であると思われる。

今回のデータはあまりにも少なく個人的な特徴に偏りがあったかもしれない。今後またさらに研究の余地は残されている、例えば若者でなくさらに上の年代ごとではどうなのか、様々な年代の混合した場合はどうなのか、男女関係や人間関係の遠近に差はあるのか、今後も話し言葉の中で多く使用されていくのか等である。今回の試みが談話標識や若者の話し言葉を考えるひとつのきっかけになればと思う。

参考文献

Ball, W. J. (1986). Dictionary of link words. London: Macmillan. [中田裕二・岸野英治訳. 1997. 「あいづちつ

- なぎ語辞典」. マクミラン ランゲージハウス .]
- Chafe, K. (1980). The deployment of consciousness in the production of a narrative. In W. Chafe (ed.), *The pear stories: Cognitive, cultural and linguistic aspects of narrative production*, 9-50. Norwood, N.J.: Ablex.
- Maynard, S. (1989). *Japanese conversation*. Norwood, NJ: Ablex.
- Saito, Makiko. (1992). A Study of the Discourse Marker *Nanka* in Japanese. MA Thesis. Michigan State University.
- Schegloff, E. A. and H. Sacks. (1973). Opening up closings. *Semiotica*, 7:289-327
- Schiffrin, D. (1987). *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Shibamoto, J. S. (1985). *Japanese Women's Language*. Orland: Academic Press.
- 金田一晴彦 (1975) 「日本人の言語表現」 講談社
- メイナード・K・泉子 (1993) 「会話分析」 くろしお出版
- 芳賀綏, 佐々木瑞枝, 門倉正美 (1996) 「あいまい語辞典」 東京堂出版
- 水谷信子 (1985) 「日英比較：話し言葉の文法」 くろしお出版
- 山根智恵 (2002) 「日本語の談話におけるフィラー」 くろしお出版
- 米川明彦 (1996) 「現代若者ことば考」 丸善ライブラリー